

全個体数推定見直しについて

ライチョウの個体数推定は 1980 年代に故羽田建三先生（信州大学）が実施した後、2000 年代初頭に中村浩志委員（信州大学）によって行われた以降実施されていない。第二期ライチョウ保護増殖事業の目標である 2500 個体を達成するためには、再び広域における個体数の把握が必要となる。

ライチョウの生息個体数は、基本的にライチョウがなわばりを維持している時期に現地調査を行い、個体の観察状況や現地に残された糞などの痕跡の搜索から 1 つ 1 つ推定したなわばりの数を元に推定する。

2014 年にライチョウ保護増殖実施計画が策定されてから中村委員や小林委員、各県による生息状況調査、各地の NPO などによりなわばり分布調査が行われた山岳を集約すると、以下の図のようになった。

火打焼山・乗鞍岳・御岳といった比較的生息面積が狭い集団は最近調査が行われたことに加え、保護増殖事業が実施された南アルプスでも、北部から南部に渡って広く調査が実施されている。ただし、羽田先生の調査時から最も多くの個体数を有している北アルプスに関しては、羽田先生が調査した範囲の 20%ほどしか調査が実施されておらず、正確な生息個体数把握のためにはより広域にわたる調査が必要であることが明らかとなった。そのため、第二期保護増殖事業では、調査が行われていない山岳を中心になわばり分布調査を実施することとする。

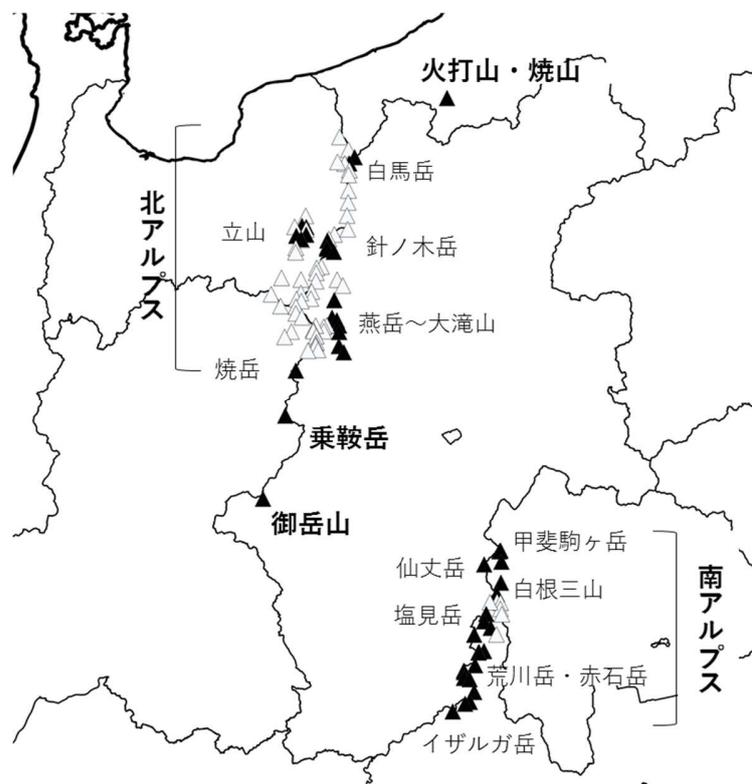


図. ライチョウの生息山岳 (△) と 2014 年以降になわばり調査が実施された山岳 (▲)